

『東京美術学校校友会月報』記事抜粋

東京美術学校近事〔十一—五〕卷号 T・二・二・十二年 月 日

○本校の生徒募集 本校に於ては、本年四月より入學せしむべき、豫備科生徒約九十人（内日本畫科二十人、西洋畫科二十八人、彫刻科塑造部十人、木彫部四人、牙彫部三人、圖案科十人、金工科五人、鑄造科五人、漆工科五人）圖畫師範科生徒約二十人を募集せらる。豫備科の入學願書提出期限、及圖畫師範科の薦舉書回送期限は、各本年三月一日より十五日迄と定められ、入學に關する詳細の事柄は、一月九日の官報廣告に掲載せられたれば、關係者は右に就て詳細承知せらるべきなり。

○上官太子祭カタログの配付 一昨年本校に於て、聖德太子に因縁ある遺品、推古朝の遺品、支那六朝初唐時代の遺品等を蒐めて展覽會を催したる際、其目錄を調製すべきよしは嚮に記す所なりしが、其後正木學校長は自ら筆を執りて目錄を書せられ、之を石盤刷版と爲し、帝室の御物佛像を始め、重要な遺品十數圖を挿入し、表紙には法隆寺金堂天蓋樂書の天人を現はしたるものを製し、昨冬出品等の關係者へ配付せられたり。因にいふ此冊子は本校化學室にて製版印刷したるものなり。

○小場助手の名譽 美術新報に於ては賞美章なるものを作りて、一年間に製作せられたる優秀なる藝術品の作者に贈呈せんとし、昨年其譽を發表せられたるが、美術新報の同人諸氏は此第一回賞美章を何人に贈呈すべきかに關し、種々凝議したる結果、遂に一致の決議

を以て、昨年十二月吾樂に於て開きたる「萬蓋あるものゝ展覽會」出品中の「藤原式雲網彩色手箱」を以て優秀なるものと認め、其作者たる本校圖案科助手小場恒吉氏に對して、本年一月廿五日を以て日本橋俱樂部にて、第一回の賞美章を贈呈せられたり。其理由は本年一月發行の美術新報紙上に詳記せられたるが、要は作品の精巧にして優麗なるのみならず、同氏の人格を反映し、氏の藝術的良心は一筆一點にも現はれ、高雅なる氣品優秀なる趣味、熱心なる研究、不撓なる丹精の凝結して此作を成さしめたるものにして、藝術に一生を捧げ、一切の世事俗情に超絶し、時を吝まず、勞を厭はず、製作を樂むこと氏の如き人にあらざれば、到底企て得ざるものなりといふにあり。之れ誠に氏を知るの言にして、而も第一回の受賞者たるは、氏の名譽なりといふべし。

○石川寺崎兩教授の病狀 教授石川光明氏は本年一月初めより腎臟炎に罹られ引籠り療養中なるが、二月中旬頃は快癒せらるべしと。
△寺崎〔広業〕教授は、客冬廿三日頃より發熱加療中なりしが、二十六七日頃よりは熱度次第に上昇して三十九度乃至四十度に至り、遂に腸窒扶斯に變じたれば、家人門生等の憂慮一方ならず、一月二三日頃は餘程注意を要する状態なりしが、主治醫南部木村の兩博士も百方手を盡されたる甲斐ありて、四五日頃よりは漸次に熱度も下降し、此分にては今後の療養を怠らざれば、平癒疑なきまでに至りたれば、一同始めて愁眉を開きたりといふ。兩氏のために、一日も速に快癒あらんことを祈るものなり。

○本校一覽の配付 大正元年より大正二年に至る本校一覽は、舊臘印刷を終る筈なりしが、本年に至りて漸く刷成したるを以て、二月

上旬に於て、例によりて本校卒業生諸氏一般に贈付せられたり。

東京美術學校近事〔十一—六。T・二・三・十二〕

○助教授の新任 圖案科助手なる小場恒吉氏は、去る二月五日本校助教授に任用せられたり。

○助手の拜命 本校日本畫科卒業生なる小泉勝爾氏は、去る二月五日本校雇を命ぜられ、日本畫科助手を申付けられたり。

○教授諸氏の紋位 本校教授白山福松、寺崎廣業、古宇田實の三氏は、去る二月十日孰れも正六位に昇叙せられ、教授石川光明、竹内久一、海野勝珉の三氏は、同月二十日何れも正五位に陞叙せられたり。

○本校卒業式 卒業期の學期も將に終らんとし、卒業生諸氏は頃日來製作に忙殺せられつゝある次第なるが、本校に於ては例年の如く、來る三月二十九日（土曜日）午後一時三十分を以て、卒業證書授與式を舉行せらるべしといふ。

○本校の新築落成期 本校玄關一棟の新築工事は二月上旬大半竣成し、其後は細部の工事を急ぎ居れるが、二月中には悉く落成すべき筈にして、三月の中旬には各教室の配置、事務室の移轉等を終つて整頓を見るべき豫定なりといふ。因にいふ今回新築せられたる玄關見付きは、悉く樺製にして圓柱を建て格天井を張り、入口には同製唐戸を付け、階上講堂の前面に當れる陳列室兼待賓室の如きも、悉く白木のままとし、其他の各室も之に副ふべき建築にして、學校として餘りに比類を見ざる見事なる建築なり。

○島田〔佳矣〕教授の出張 同氏は鹿兒島縣の囑託により、同縣に於ける工藝圖案講習會の講師として、去る一月廿七日出張せられ、二月十三日歸京せられたり。

東京美術學校近事〔十一—七。T・二・三・三一〕

○職員の紋位 教授岩村透、囑託小島憲之の兩氏は、二月廿八日付を以て、各從四位に昇叙せられたり。

○校長室事務室の移轉 前號にも記したる本校玄關一棟の新築なりたるを以て、三月十七日より、校長室、庶務教務會計室は、新築の方に移りたり。

○三越呉服店懸賞畫受賞者 三越呉服店に於て、千圓の賞を懸けて繪ピラ圖案を募集したることは兼て記す處ありしが、二月末其審査の結果を發表せられたる中、三等賞の第一席に本校西洋畫科三年の小松喜代子氏、其第二席に同科二年の清水良雄氏、第三席に本校西洋畫卒業生白瀧幾之助氏入選したり。

○ネクタイ圖案懸賞當選者 ネクタイ專業なる下谷區谷中天王寺町南意匠部にては、先頃ネクタイ圖案的募集を爲したるが、其審査の結果、本校卒業生生徒諸氏にして入選したるもの左の如し。

一等賞（一人）高橋昇太郎（東京）△二等賞（一人）伊井彌之助（桐生）△三等賞（二人中）高橋昇太郎（東京）△四等賞（五人中）番匠勇作（東京）淺野廉（東京）△五等賞（十人中）高橋昇太郎（東京）小川巽（香川）伊井彌之助（桐生）伊藤豊（東京）山崎陽一（東京）清水吉臣（東京）△等外（二十人中）加藤卓爾

(京都) 西村小二郎 (東京) 番匠勇作 (東京) 三野雅一 (金澤) 松本末男 (東京)

因にいふ。賞金は一等金五十圓、二等金二十圓、三等金十五圓
づゝ、四等金拾圓づゝ、五等金三圓づゝ、等外金一圓づゝなり。

○生徒の宮城拜觀 本年三月末卒業すべき本校圖書師範科生徒及特別の課程を履修する生徒三十五名は、去る二月廿七日午前九時より、白濱〔徴〕教授引率の下に、宮城拜觀を差許されたり。

○東臺畫會の講演會と常務委員 東臺畫會にては、今後毎月一回茶話會を開きて、會員の親睦を圖り、意見の交換、講話、展觀、美術書の紹介等をなすよしにて、其第一回は去二月廿二日午後一時より東京美術學校文庫にて開かれ、白石村治氏の「周文雪舟に關する研究」と題せる講話、並に此派に關する眞蹟、摸本、印本の展覽等ありたり。又同會の委員は、山脇晴雲、結城素明、鶴田機水、渡邊萊渚、伊藤龍涯、松岡映丘、平田松堂の諸氏撰任せられたりといふ。

○寺崎〔広業〕教授の轉地療養 同教授はその後、漸次快方に赴かれ、三月十六日より湯河原温泉へ轉地療養せらる。

○入學志願者の撰抜試験 本校に於て今回募集せられたる各科生徒中、日本畫、西洋畫、圖案、漆工の豫備科、並に圖書師範科は、各その募集人員に超過したるを以て、三月三十一日より撰抜試験を執行せられ、四月七八日頃には、その合格者の發表を見るべし。

東京美術學校近事〔二十一〕。T・二・四・三〇〕

○小堀〔鞆音〕教授の保存會委員 小堀教授は、去る三月十九日付を以て、古社寺保存會委員を仰付けらる。

○結城〔素明〕助教授の昇任 結城助教授は、去る三月三十一日付を以て、本校教授に昇任せられ、高等官七等に叙せられたり。

○第二十二回卒業式 本校第二十二回卒業證書授與式は、例年の如く、去る三月二十九日午後一時三十分より舉行せられたり。式場は講堂を以て之に充てられ、各所來賓、卒業生來賓、本校職員、卒業生の著席するや、正木〔直彦〕學校長は式辭に引續きて、各本科生八十五人、撰科生十四人、計九十九人に順次卒業證書を授與せられ、尋で卒業生に對して告辭を陳べられ、次に文部大臣代理として臨場せられたる福原〔鐔二郎〕文部次官は訓辭を朗讀せられ、卒業生總代彫刻科中谷宏運氏の答辭ありて、式を終り、職員卒業生は紀念の撮影をなし、來賓一同は茶菓の饗應を受け、日本畫科及西洋畫科の教室に陳列したる、各科の卒業製作を觀覽して退散したり。又卒業製作は翌三十日例によりて、職員卒業生の親族知己等の觀覽を許したるが、本年の觀覽者は非常に多く千百餘名と注せられたり。その卒業生姓名、文部大臣訓辭、卒業生答辭等は左の如し。

卒業生姓名(○印は教員志願者)

日本畫科

本科	○篠田十一郎	岐阜縣平民
同	○永田 良亮	茨城縣平民
同	○船越 謙	兵庫縣平民
同	○内田他治郎	石川縣士族
同	○田鎖 秀	岩手縣士族

同	○高橋 卓一	千葉縣平民
同	○川路 誠	廣島縣平民
同	伊藤 順三	東京府平民
同	柏谷 義一	大阪府平民
同	佐藤 久米	茨城縣士族
同	○麻畑 重	福岡縣士族
同	中島 研	静岡縣平民
同	田代 猶喜	福岡縣士族
同	○小泉 政吉	秋田縣士族
同	○河島 義市	兵庫縣平民
同	堀江 清	島根縣士族
同	丹羽善五郎	群馬縣平民
同	赤坂 永	新潟縣平民
同	木實谷喬壽	福島縣平民
撰科	鈴木六三郎	東京府平民
同	山下 武一	福岡縣平民
同	上林 重德	東京府平民
同	太田 福藏	東京府平民
西洋畫科		
本科	五味 清吉	岩手縣平民
同	熊岡 美彥	茨城縣平民
同	森山 肇	東京府士族
同	吉村 芳松	東京府平民
同	○酒井 榮之	富山縣平民

同	安達 賢治	静岡縣平民
同	牧野 虎雄	新潟縣士族
同	○川上 四郎	新潟縣平民
同	大塚 豐	東京府士族
同	坪井 玄治	東京府平民
同	江馬 春吉	岐阜縣平民
同	○布目 敏行	石川縣平民
同	中尾 春雄	廣島縣平民
同	○清野 善彌	宮城縣平民
同	河目 悌二	愛知縣士族
同	及川 吳郎	岩手縣平民
同	兒玉直之助	秋田縣平民
同	○平澤 文吉	新潟縣平民
同	竹村 岱造	新潟縣平民
同	鈴木 梅月	新潟縣平民
同	○樋渡留太郎	山形縣平民
同	○田中 泰吉	東京府士族
同	高橋 信	千葉縣士族
同	羽場 金司	青森縣平民
撰科	三宅 鑑吉	東京府平民
同	石坂 武一	東京府平民
同	白 常齡	支那人
同	陳 之駟	支那人

彫刻科 (×は木彫、△は牙彫、
其他は塑造部卒業)

同	堀	義二	山口縣平民	本科	磯野	三郎	富山縣土族
同	× 佐々木長次郎		富山縣平民		鑄	造	
同	× 小室	順吉	秋田縣土族	本科	樋笠	岩太郎	香川縣平民
同	中谷	宏運	富山縣平民	漆	工	科	
同	保岡	熊彦	東京府土族	本科	三野	吉明	香川縣土族
同	× 千石	泰治	福井縣平民	同	酒卷	洵	埼玉縣平民
同	谷本清太郎		香川縣平民	同	藤芳	太直	熊本縣土族
同	田邊	孝次	石川縣土族	同	松林	亥三郎	石川縣平民
同	山内	文世	福井縣平民	撰	科	溝淵	好三郎
同	安部	然	大分縣平民	同	岩城	彌一	富山縣平民
同	金澤彌三郎		東京府平民	圖	畫	師	範
撰	井上	久次	東京府平民	科	小坂	留太郎	北海道平民
同	△ 佐瀨	芳之助	千葉縣平民		中村	義守	岩手縣平民
同	× 志摩	鶴二	福井縣平民		新野	利三郎	東京府平民
同	木原	茂	東京府土族		工藤	廉平	大分縣土族
同	山本	豐	東京府平民		杉浦	魁	福島縣土族
圖	按	科			阿部	忠助	岩手縣平民
本科	○ 瀧川	一則	鳥取縣土族		宮内	陽三	長野縣平民
同	○ 森田	潔	京都府平民		小堀	章	茨城縣平民
同	廣川	松五郎	新潟縣平民		佐藤	三代治	宮城縣平民
同	津村	末男	茨城縣平民		武田	新太郎	長野縣平民
同	齋藤	佳藏	秋田縣平民		小林	金治	長野縣平民
同	町田	英	群馬縣平民		高見	學	福岡縣土族
金	工	科			石川	彌八郎	新潟縣平民

木山 一雄 岡山縣平民
 大澤 左一 長野縣平民
 服部 寅男 熊本縣士族
 石川 確 福井縣士族
 渡部 儀八 福島縣平民

卒業生科別人員比較

科名	昨年 本科	同上 撰科	本年 本科	同上 撰科
日本畫科	一三	三	一九	四
西洋畫科	一九	二	二五	三
彫刻科	一〇	三	一一	五
圖按科	四	一	六	一
金工科	六	二	一	一
鑄造科	六	一	一	一
漆工科	二	一	四	二
圖畫師範科	二二	一	一八	一
計	八一	一〇	八五	一四

文部大臣訓辭

東京美術學校ガ、本日ヲ以テ卒業證書授與式ヲ舉グルニ方リ、本大臣ハ
 茲ニ卒業生諸子ノ爲ニ祝シ、併セテ諸子ニ諭グル所アラントス。

惟フニ、美術ハ文明ノ精華ニシテ、獨リ國光ヲ中外ニ宣揚スル所以ナル
 ノミナラス、其ノ純雜ハ直ニ人情風俗ノ淑否ニ關スルモノアリ。蓋シ作
 品ノ良否ハ、天才ノ高下ト技術修養ノ深淺トニ因ルト雖モ、亦作家品性
 ノ如何ニ職由ス。故ニ諸子ハ不斷ニ技術ノ研磨ヲ怠ラザルト共ニ、心ヲ

精神ノ修養ニ潛メ、本校ニ學ベル所ヲ階梯トシテ美術ノ堂奥ニ入り、國
 民ノ性情ニ良好ナル感化ヲ與ヘ、以テ千古ニ不朽ナランコトヲ勵メザル
 ヘカラズ。若シ夫レ教育ノ任ニ當ルモノハ、公務ヲ奉ズルコト忠實ニ、
 生徒ヲ導クコト惻切ニ、畜ニ技藝ノ師タルノミナラス、人格德操ニ於テ
 モ、亦衆生ニ範タランコトヲ期セヨ。

大正二年三月二十九日

文部大臣法學博士 奥田 義人

卒業生答辭

今茲ニ大正二年三月、洋々ノ氣ニ急ガレテ、薰床シク東都ノ天地ヲ彩ラ
 ントスルノ好時期ニ當リ、文部大臣閣下ヲ始メトシ、朝野名士諸彦ノ御
 臨席ヲ辱ウシ、本校第二十二回ノ卒業ノ盛典ヲ舉行セラレ、特ニ懇篤ナ
 ル諭辭ヲ賜ル、生等ノ光榮何モノカ之ニ如カンヤ。

回顧スレバ生等本校ニ學ビテヨリ既ニ五星霜、其間決シテ短シトセズ、
 然ルニ學校長及諸先生ハ、夙夜攷々トシテ懇篤ナル教訓ヲ以テ生等ヲ指
 導セラレ、茲ニ各々其業ヲ卒フル事ヲ得タルノミナラス、自己ノ本領ノ
 アル處ヲ覺リ、且ツ過去將來ノ趨勢ヲ窺ヒ得タルハ、之レ偏ニ其賜ニ外
 ナラズト深く感激スル所ナリ。

惟フニ生等恰モ解纜ノ良期ニ會フト雖、前途ヲ望メバ茫洋タリ、生等ノ
 就カントスル業務ハ多岐ナリ、將ニ何ヲ以テ此間ニ處センカ、見ヨ混沌
 タル宇宙ノ間、森羅萬象一トシテ安靜ナルモノナシ、天ニ懸レル赫々タ
 ル金輪ハ、群星ヲ率キテ運行シ、吾人ヲ安載スル地軸ハ、亦之ニ伴フテ
 轉回ス、乾坤ノ間形體ヲ寓スルモノ、皆變動セザルナシ。吾人人類モ亦
 獨リ轉化セザル理アラナヤ。此ニ於テカ生等豈尋常一般ノ覺悟ヲ以テシ
 テ可ナランヤ。生等益々天賦ノ智德ヲ發達シ、本邦獨特ナル美術ノ精粹
 ヲ發揮センコトヲ勉メ、以テ斯界ニ貢獻シ、高恩ニ酬ヒ、延イテハ國家

盛運ノ一助タラムコトヲ期セン哉。

若シ夫レ教育ニ従事スルモノハ、本校教養ノ趣旨ニ則リ、忠實熱心其職ニ盡シ、社會ニ於ケル美術思想ノ普及ニ努メ、國家ノ生等ニ豫期スル所ニ悖ラザラン事ヲ期ス。聊カ蕪辭ヲ述ベテ答辭トス。

大正二年三月二十九日

東京美術學校總代

中谷宏運

○新入學生 本年入學志願者撰抜試験に關しては、前號に記す所ありしが、該試験は三月三十一日より始め、四月二日各科とも終りを告げ、四月八日に至りて、官報を以て入學許可者の人名を發表せられたり。其人名及人員等左の如し。

豫備科 (日本畫志望)

- 星川 清雄 山形士 浦志 武雄 福岡平
- 宮内 龍子 千葉平 湯川 直春 大阪平
- 田中 富彌 東京平 麻田 寛嶺 新潟平
- 神谷 深 石川平 岩田 正巳 新潟平
- 加藤 秀男 東京平 林 二郎 東京士
- 松浦 孝忠 富山平 伊澤晴太郎 宮城平
- 穂積 正雄 福島平 三宅 一朗 愛知平
- 山田 安士 山形士 山崎善次郎 佐賀士
- 米林 武雄 富山平 矢部 友衛 新潟士
- 樹下 信雄 東京平 矢部 季繼 大阪平
- 友田 宣忠 福井平 江 直英 長崎士

豫備科 (西洋畫科志望)

- 小泉 素彦 東京士 鮫島 利久 鹿兒島士
 - 小野信治郎 滋賀平 小栗 清造 愛知平
 - 加納川郁之助 大阪平 鱈 利彦 千葉平
 - 飯森 定省 石川士 澁谷 重保 神奈川平
 - 外山 佐傳 熊本平 小原 整 鳥取士
 - 玉井正之助 愛媛平 江木 善一 東京平
 - 田代 眞 熊本士 黒田 新 大阪平
 - 池ノ内三郎 埼玉平 淵 弘三 佐賀士
 - 秋葉彌三郎^(草) 鳥取平 大塚 辰夫 大分平
 - 佃 武昭 岡山平 齋藤 赤心 福岡平
 - 松本 博 廣島平 宮 芳平 新潟平
 - 河越虎之進 長野平 藤川 宇助 岩手平
 - 加藤 廣 埼玉平 坂東 親次 兵庫士
 - 赤松彦次郎 東京平 河上 大二 山口士
 - 細井文治郎 愛知平 藤田 雅夫 宮崎士
 - 遠田 運雄 石川平 鍋山 伴六 福岡平
 - 谷口 午二 鹿兒島士 笹本清一郎^(森) 青森士
 - 山本治兵衛 埼玉平
- 豫備科 (彫刻科塑造部志望)
- 徳見 均 佐賀士 米 治一 富山平
 - 宮川 準一 石川士 寺畑助之丞 富山平
 - 室谷秀次郎 石川平 日名子實藏 大分平
 - 濱田 三郎 神奈川平 佐々 重貞 大阪平

岩越 二郎 熊本士

豫備科(彫刻科木彫部志望)

奥原謙太郎 東京士 山田 猷 埼玉平

豫備科(圖案科志望)

高橋 鐵雄 石川士 島田 準一 石川士

杉本盛二郎 石川士 寺田 元吉 富山平

大石 靖 富山平 矢野金太郎 静岡平

水町和三郎 佐賀士 服部 季彦 東京士

加藤 善治 秋田士 黒木 資一 鹿兒島士

改井 徳憲 富山平 阿部 摺英 石川士

豫備科(金工科志望)

早水 靜馬 群馬平 早川 健夫 新潟平

染谷駒太郎 東京平 栗本幸次郎 神奈川平

豫備科(鑄造科志望)

稻場助次郎 富山平 向山 義孝 長野平

中山 巍 岡山士

豫備科(漆工科志望)

三好 政次 宮崎平 和氣 善信 香川平

鶴田恒二郎 石川平 平野 清吾 岩手平

田口啓次郎 秋田平 岡 富三 大阪平

菊池 馨 青森平 加藤 眞 福井平

圖畫師範科第一年級

神庭 亮三 鳥取平 豊山 廉 岡山平

小林 寛 山梨平 伊藤好太郎 山梨平

瀬戸 秀壽 宮崎平 元上 岸造 愛媛平

水野 一夫 廣島平 佐藤 佐 宮城士

曾野 勝己 三重士 酒井 英吉 福島平

山田 武平 宮城士 八木 悌二 静岡平

東谷 俊藏 三重平 澁澤暁三郎 群馬平

安藤 治作 岐阜平 三澤 佐助 山形平

中島 信 岐阜平 森 正男 東京士

備考 以上の中、鑄造科の中山巍は四月十日に、金工科の栗本

幸次郎は四月十二日に、入學を許されたるもの、此他師範科

中、入學を許されたる後、取消されたるもの一人あり。

入學志願者及許可者比較表

志望科別	昨年の志願者	同士の許可者	本年の志願者	同士の許可者
日本畫科	三三	二三	二七	二二
西洋畫科	九六	二七	一〇五	三五
彫刻科(塑)	一二	一二	一三	九
同(木)	五	五	二	二
同(牙)	一	〇	〇	〇
圖案科	一三	一一	三一	一二
金工科	八	八	五	四
鑄造科	三	三	四	三
漆工科	五	五	一〇	八
師範科	五七	二〇	五五	一八
計	二三三	一一四	二五二	一一三

○研究科入學と再入學 左の諸子は各頭書の日を以て、各研究科入

學、並に再入學を許可せられたり。

研究科入學

同	四月七日	(日、撰)	鈴木六三郎
同		(西、本)	五味 清吉
同		(同)	熊岡 美彦
同		(同)	森山 肇
同		(同)	牧野 虎雄
同		(同)	川上 四郎
同		(同)	大塚 豊
同		(同)	坪井 玄治
同		(同)	布目 敏行
同		(同)	安達 賢治
同		(同)	中尾 春雄
同		(彫、本)	谷本清太郎
同		(同)	堀 義二
同		(同)	田邊 孝治
同		(同)	山内 文世
同		(同)	佐々木長次郎
同		(彫、撰)	井上 久次
同		(圖、本)	廣川松五郎
同		(漆、本)	藤芳 太直
同	四月十日	(日、本)	川路 誠
同		(同)	伊藤 順三
同		(同)	小泉 政吉

同 (同、撰) 山下 武一

四月十日 (漆、本) 松林亥三郎

再入學

四月十日 (日、西へ) 丹羽善五郎

同 (豫、彫、塑へ) 及川 吳郎

備考 (日、撰) は日本畫撰科研究科に入學なり。餘は之に倣ふ。

東京美術學校近事 (十二—二。T・二・六・一三)

○長原助教の敘位 助教長原孝太郎氏は、四月廿一日付を以て、正八位に敘せられたり。

○京都奈良等の修學旅行 從來毎年奈良京都地方の生徒修學旅行は、卒業期に入りし頭初の九月に於て施行せらるゝこととなり居れるが、是迄の経験より、卒業製作の構圖意匠等の都合上、寧ろ四年級第三學期に於て施行したる方便益なりとの主意より、本年は五月十三日より三週間施行することとなり、一同同夜を以て出發せり。

指導教官及事務員は、沼田〔勇次郎〕教授、結城〔貞松〕教授、羽田〔禎之進〕囑託、北浦〔大介〕雇の四氏なり。

○豫備科補欠入學 前號掲載後に於て、豫備科へ補欠入學を許されたるものは、四月廿四日付にて村井勝造氏は鑄造科志望として、五月一日付にて林良三氏は彫刻科木彫部志望として、各入學を許されたり。

○研究科入學 西洋畫科卒業生吉村芳松氏は、四月十六日研究科へ

入學せらる。

○獎學資金寄付 川端家にては故玉章翁の遺志に依り、本校日本畫科生徒の獎學の費途に充つるため金壹千五百圓を本校へ寄贈することとなりといふ。

東京美術學校近事〔十二—三。T・二・七・一三〕

○教授諸氏の陞等と敍位 藤島〔武二〕教授は去る五月二十三日高等官六等に陞敍せられ、結城〔貞松〕教授は同月三十日、從七位に敍せられたり。

○學校長教授諸氏の敍勲 六月十八日付を以て正木〔直彦〕學校長は勲三等に、高村〔光雲〕教授は勲四等に敍せられ、海野〔美盛〕教授は勲六等に、長原〔孝太郎〕助教授は勲八等に敍せられたり。

○助手の任命 本校本年の日本畫科卒業生篠田十一郎氏は、去る五月二十六日、本校雇を命ぜられ、日本畫科助手を申付けられたるが、六月一日より四週間、歩兵第六十八聯隊へ勤務演習のため召集せらる。

○開校廿五年紀念式準備 本校授業は去る明治廿二年二月一日より開始せられ、來年二月は恰も滿二十五年に當り、且新築校舎の全部も來年三月迄には咸な落成すべき筈なるを以て、其際新築落成の祝賀並に報告と共に、開校滿二十五年紀念會を催し生徒作品及本校所藏の参考品展覽會等を開き、且職員中開校當時より勤續せられたる三四の人々の勤續二十五年祝賀會をも催さんとて、目下相談中なりといふ。

○研究科入學者 圖案科卒業生津村末男、漆工科卒業生酒卷洵の兩氏は、各五月三十日研究科へ入學せられたり。

○ライオン齒磨圖案の當選者 先頃ライオン齒磨の縣賞廣告圖案を同發賣店に於て募集せられたるが、應募總數は七千餘通にして審査の結果、本校圖案科第二年原三郎氏は、二等賞（金五千圓七人中）に當選せられたりといふ。

東京美術學校近事〔十二—五。T・二・一〇・一五〕

○教官諸氏の檢定委員 本校教官中、囑託小島憲之、教授久米桂一郎、囑託乙竹岩造、岡岡田起作の四氏は、何れも去る六月廿八日付を以て、文部省教員檢定委員會臨時委員仰付けられたり。

○關野囑託の兼務 囑託關野貞氏は、去る六月三十日文部技師に兼任せらる。

○石川教授の特旨敍位と卒去 教授石川光明氏は、今春來病氣の處、療養の效果顯はれず、去る七月三十日に至りては危篤に陥りたれば、特旨を以て位一級を進め從四位に敍せられたるが、同日遂に卒去せられたり。洵に痛むべく惜むべし。

○小場〔恒吉〕助教授の應囑と出張 小場助教授は東京帝國大學より、朝鮮古墳壁畫模寫を囑託せられ、八月七日朝鮮へ出張せられたり。

○藤島〔武二〕教授の敍位 藤島教授は、八月十一日附を以て、正七位に敍せらる。

○教授諸氏の美術審査委員 本校教授中、高村光雲、黒田清輝、竹

内久一、久米桂一郎、岩村透、岡田三郎助、和田英作、寺崎廣業、白井保次郎、小堀輅音の十氏は、何れも、八月十一日付を以て、第七回文部省美術展覽會の審査委員を仰付けらる。

○新設道路の著手 現今の本校構内を中斷して表門より裏門側に貫通し、屏風阪通りと谷中墓地に通ずる道と連絡すべき新設道路は、九月初旬其位置測定済となり、是より作業に着手すべき筈にして、本年中にはほゞ其工を竣るべき見込みなりといふ。此道路竣工の上は、本校は道路の東西に分割せられ、兩門對立の觀を呈するに至るべし。

○福井鴻逸氏卒業 卒業試験を延期せられたる圖案科卒業期福井鴻逸氏は、七月二十六日卒業せられたり。

○本學年の特待生 學業品行共に優等の廉により、本學年の特待生に選定せられたるは、左の諸子なり。

佐々木義政(日一) 飯塚 章三(西一) 名越 豊(西二)
木村 圭三(西二) 片岡角太郎(彫一) 雨田外次郎(彫二)
林 健市(彫四) 林 威三(圖二) 淺野 廉(圖三)
安藤喜八郎(圖四) 高梨 靜治(金一) 手島 達雄(金三)
石崎 誠二(漆四) 五十嵐三次(漆四)

姓名下の(日一)は日本畫科一年なりとす、以下倣之。

○前學年の精勤者 前學年中、學業に精勵せし廉を以て、精勤賞狀を授與せられたる諸氏左の如し。

田上 尙之(日一) 河井 隆一(西撰二)
田島 龜彦(彫撰一) 長塚 廣造(彫撰二)
高梨 靜治(金一) 石塚 明三(金撰二)

村田延之助(金撰四) 渡邊 健吉(金撰四)

石崎 誠二(漆四) 五十嵐三次(漆四)

○撰科生入學 毎年九月に於て施行せらるる本校撰科生の入學試験は、本年も九月十五日より十九日迄施行せられ、其結果同月廿三日入學を許されたるもの左の如し。

日本畫撰科(志願者三人)

伍 靈 支那 孟 憲章 支那
陳 英 支那

西洋畫撰科(志願者三人)

凌 驥 支那 劉 鏡源 支那
李 廷英 支那

彫刻撰科(木彫)(志願者六人)

佐藤三重三 三重平 山脇二太郎 新潟平
石田 午郎 大坂平

同 科(牙彫)(志願者四人)

勝海 俊雄 静岡平 日高 豊彦 鹿児島平
楊 鑄成 支那

金工撰科(志願者八人)

天野 寧三 東京平 松本春次郎 香川平
武川 誠夫 東京平 藤原 一郎 東京平

以上の外、鑄造、漆工にも、壹名づゝの志願者ありしも入學を許されず、

○本校教授諸氏の官等陞叙 本校教授中、教授大村西崖、同白濱徵、同白井保次郎、同島田佳矣の四氏は高等官四等に、教授櫻岡三四郎氏は高等官五等に、教授鎌田彌壽治氏は高等官六等に、何れも九月二十三日付を以て陞叙せられ、教授岡田秀氏は十一月十七日付を以て高等官六等に陞叙せられたり。

○乙竹囑託の昇等 囑託乙竹岩造氏は、その本官たる東京高等師範學校教授に於て、九月十九日高等官三等に陞叙せらる。

○農展審査員の任命 學校長正木直彦、教授海野勝珉、同大澤三之助、同岡田三郎助、同島田佳矣の諸氏は、何れも十月三日付を以て、農商務省主催の第一回圖案及應用作品展覽會審査員を囑託せられたり。

○職員の出張 教授海野美盛氏は九月上旬一たび鹿兒島に出張されしが、十月中旬再び十七日間を以て、鹿兒島市へ出張を命ぜられ、教授白濱徵氏は、圖畫師範科三年生の學術實地指導のため、十月九日より十日間を以て、京都大阪の二府、奈良三重の二縣へ出張せられたり。

○休職満期 本校助教授柴一雄氏は、休職中なりしが、去る十月三日を以て満期となりたり。

○本校設置紀念式 十月四日は本校設置紀念日なるを以て毎年其式を舉行することとなり居れるが、本年もまた當日午前九時より、職員卒業生生徒、本校講堂に會して其式を挙げたり。正木校長の挨拶ありたる後、日本畫科の卒業生早崎梗吉氏は、支那漫遊中見聞せし

處につきて種々の談話を試みられ、續きて同科卒業生にして、新に印度より歸朝せられたる桐谷洗鱗氏が、印度旅行中の不便辛苦風俗等に關する講話あり、最後には細川風谷の講談一席ありて式を終りたるが、時正に午後一時に近く、夫より茶菓を饗せられ、歡を盡して退散せり。而してまた當日は別室に早崎梗吉氏の將來せられし支那繪畫二十餘點、並びに桐谷洗鱗氏が、自ら印度に於て發掘せられたる石佛像、石造裝飾並に佛具、風俗衣裳、及西藏、緬甸等の繪畫佛像等數十種を陳列せられ、來會者の參考に供せられたるは、其道の人々に多大の裨益を與へたり。

○本校の修學旅行 秋季に於ける修學旅行は、昨年より各科各別にその志す所に向ひて、教授事務員諸氏付添ひて出張することとなり、本年も例に倣ひて、十月廿六日より三日間施行せられたり。即ち日本畫科は信州に向ひ、澁溫泉を経て、上林溫泉、山田溫泉等に赴きて秋色を探り、西洋畫科は、野州足尾より日光中禪寺の湖畔に出で、湯本に到り、日光町に歸りて風光を賞し、彫刻科もまた日光に赴きて、日光廟を拜し、中禪寺湖畔等を跋涉し、圖案科は國府津より湯本宮の下を経て蘆の湯に宿し、箱根を一周して、乙女峠を踰えて御殿場に出で、歸京し、金工科は妙義山に詣りて磯部に宿り、伊香保榛名を巡り、鑄造科も箱根に赴き、舊道を通りて湯本に歸り、漆工科は犬吠岬、銚子より利根川を溯り、香取、成田を巡禮し、師範科は船にて兩國を發し、利根川を下り、銚子犬吠岬を経て、千葉に歸り、木更津に至りて乗船歸京の途につきたりといふ。

○師範科第三年生の修學旅行 本校圖畫師範科卒業期なる第三年級の生徒諸氏二十名は、白濱教授引率の下に在りて、去十月九日より

十日間を以て、學術實地研究のため、京都大阪の二府、奈良縣三重縣へ出張し、各學校の實地授業を視察研究したり。

○其後の研究科入學 本學年に入りてより、研究科へ入學せられし諸氏左の如し。

研究科入學者

- 十月 一日 金工科へ 磯野 三郎
- 同 三日 西洋畫科へ 酒井 榮之
- 同 同 師範科へ 安藤 義茂
- 同 十三日 西洋畫科へ 川上 四郎
- 十一月七日 圖案科へ 福井 鴻逸

東京美術學校近事〔十二一七。T・二・十二・二七〕

○職員の敘位 本校職員中、囑託乙竹岩造氏は從五位に、教授白濱徵、〔同白井保次郎〕、同島田佳矣、同大村西崖〔四〕の三氏は各正六位に、教授櫻岡三四郎氏は從六位に、教授鎌田彌壽治氏は正七位に、孰れも去る十一月廿一日昇敘せられたり。

○職員の出張 教授藤島武二氏は學術研究のために、十一月二十五日より三十日間朝鮮へ、教授島田佳矣氏も十二月一日より二週間石川縣下へ孰れも出張せらる。

東京美術學校近事〔十二一八。T・三・一・三〇〕

○教授の主任と擔任 舊臘十二月十五日付を以て、寺崎〔広業〕教

授は日本畫科主任を命ぜられ、竹内〔久一〕教授は彫刻科牙彫部擔任兼務を命ぜられたり。

○解雇と囑託 客歲十二月十九日、雇鹿毛屋藏氏は願に依り雇を解かれ、雇畑正吉氏は、雇を解かれ、更に木彫授業を囑託せられたり。

○關野〔貞〕囑託の歸京 朝鮮總督府の囑託を受けて、古美術建築等調査のため、朝鮮内地旅行中の關野囑託は、客歲十二月十八日歸京せられたり。

○雇員の任官 文庫掛なる雇北浦大介氏は去年十二月二十六日付を以て、東京美術學校書記に任ぜられたり。

○本校生徒募集 本校生徒豫備科及圖畫師範科生徒は例年の如く募集することとなり客歲十二月廿四日、同廿六日、同廿九日の官報廣告を以て發表されたり、其人員を擧ぐれば、

豫備科 約九十人

内

日本畫科	二十人	西洋畫科	廿八人
彫刻科	十五人	内	
		塑造部	十人
		木彫部	二人
		牙彫部	三人
圖按科	十二人	金工科	五人
鑄造科	五人	漆工科	五人
圖畫師範科	約廿五人		

而して入學願書の差出期限は、來る三月二日より同月十四日までにして、本年募集の圖畫師範科生徒には、從來の如く學資を給與せざ

ることとなりたり。猶入學志願者の心得、願書の提出方、選抜試験の課目、受験者の携帶品等は、悉く載せて前記の日の廣告にあるを以て、必要の人々は右に就きて承知せらるべし。

○新設道路と門衛所の落成 兼て記したる本校構内を中斷して、屏風坂通りより谷中へ通ずる幅六間長百廿六間の新設道路は、昨年未に至りて全く落成し、兩門衛所も同時に竣成したるを以て、本年に入りてよりは從來の裏門は閉鎖せられ、新設道路の中央位置より左右に兩門を入ることとなり、道路は未だ車馬の通行を許さざるも、徒歩のものはその通行を默許しつゝあり。本校に取りては不便を來たしたるも、公衆は餘程便利を得るなるべし。因にいふ公然此道路の車馬の通行を許すは、來三月末頃なるべしと聞く。

○本校の改築落成と紀念展覽會 本校の改築は漸次に竣成を告げ、最早大部分は落成したる譯にて、此後は供待所倉庫等の雜建物を造營するのみなれば、左程に手數も掛らず、且經費も本年度限りなりとの事にて來る三月中には是非共全部竣成すべき筈にて、此竣成を告ぐると共に、恰も本年の卒業式あるべく、同式は毎年三月二十九日なれば、之に引續きて開校滿二十五年の紀念式を擧げ、生徒成績品並に所藏品の紀念展覽會を催さるべしといふ。日取は未だ確定せざれども三月三十日か三十一日頃より、凡そ五日間位開催せらるべき見込なりと。

関連事項

① 小場恒吉の起用

大正二年二月五日、小場恒吉（明治四十一年一月八日以降本校雇、図

案科助手）が助教授に任命された。小場は明治十二年秋田県生れ。

同三十六年七月本校図案科を卒業し、茨城県立龍ヶ崎中学校、秋田県立秋田工業学校の教諭を勤めたあと、同四十一年一月に本校雇（図案科助手）となった。彼は既述（35頁）のように大正元年から同三年にかけて高勾麗古墳の壁画模写に従事していたが、その傍ら、制作にも意欲を燃やし、大正二年一月二十五日、彼の「藤原式纒彩色手箱」は第一回賞美章受賞の榮譽に輝いた。この手箱は前年十二月に吾樂が開催した万蓋あるもの展覽會（香取秀真・津田信夫・石井吉次郎・堆朱楊成・藤井達吉・豊川楊溪・渡辺香涯・磯矢完山・小場恒吉ら出品）の出品作で、これが一年間に製作された美術および工芸品の中の最優秀作に与えられる『美術新報』主催の賞美章を授与されたのである。小場は日本古来の美術工芸および建築裝飾に関する研究家で、宇治鳳凰堂の彩色模様に着想を得、宝相花や唐草模様、纒彩色法や金泥による毛描き等々を応用してこの手箱を作り、これによって一躍名を知られるようになった（賞美章授与については、『美術新報』第十二卷第四号参照。また、同誌第十二卷第六号には小場が腐骨という筆名で製作談を寄せている）。



小場恒吉

家で、宇治鳳凰堂の彩色模様に着想を得、宝相花や唐草模様、纒彩色法や金泥による毛描き等々を応用してこの手箱を作り、これによって一躍名

② 川端玉章死去

大正二年二月十四日、もと本校教授川端玉章が死去した。『東京